

9月30日 みんな良くなりたい

昔、やんちゃ連中に手を焼いていた私に、ある校長先生がこんな話をされた。「愛川さん。悪くなりたいなんて思っている生徒はいないよ。みんな良くなりたいと願ってるんだ」。ハッとした。生徒指導ではよく、生徒の問題行動は『助けて欲しい』のサインだといわれている。私は忙しさにかまけて、そのサインを見逃していた。いや、気づいていながら疎ましさのあまり目を閉ざしていたのかもしれない。

長く教師をしていると、担任をした生徒でさえ、顔と名前を忘れてしまうものだ。しかし、手のかかった生徒の顔は忘れたくても忘れられない。

ある学校の同窓会に呼ばれた際、「先生、俺のこと覚えてる」と、ひげ面のあんちゃんに声をかけられた。顔を見た瞬間「あっ、M川や。忘れるわけないやろう、おまえには手を焼いたからな」と返した。彼は笑いながら、「若気の至りや、許して。俺、今、小学校のPTAで役員してんねん。こうみえて、ちゃんとお父ちゃんしてるんやで……」。

私は、彼が間違いなく「良き父親」であることを知っている。彼との思い出がそれを証明してくれる。

文化祭が終わった後、生徒数人と展示物の片付けをしていた。「先生塾があるから、私ら帰らなあかんねん」と、途中でほとんどの生徒が帰っていった。私が黙々と片付けをしていると、どこから聞きつけたか数人が手伝いに来てくれた。部活もしていない、勉強もしない、そんなやんちゃ連中ばかりだった。その中にM川の姿もあった。「なあ、M川。おまえ髪の毛いじったり、無断でバイトしたり、なんで担任を困らすことばかりするんや」。「先生、ごめんな。若気の至りやと思って許して」と照れくさそうにM川は笑った。片付けが済むと「先生ごみ捨ててくるわ」とM川。今まで教室の掃除さえたことのない彼が、率先して大きなゴミ袋を抱えると、「じゃあ俺は燃えないゴミ、おまえは大型のゴミな」と、やんちゃ連中がおのおの役割を分担し、日が落ちる前にすべての作業を終えることができた。

痛みを知っているものは人の痛みがわかる。あのときの校長の言葉がよみがえった。

